現代における視聴覚教育の課題

―コミュニケイション過程を中心として―

野津良夫

（昭和三十三年十一月十日受理）

視聴覚教育は何をめざすかという事は、単に今日では、教育方法論という狭い分野に限らず、教育全般にかゝわる問題であるとともに、むしろ一般的な認識理論及び社会理論の根柢に横たわる大きな問題となつている。十七、八世紀以来のコメニウス、ルソウ、ペスタロッチ等の先覚者によつて唱えられた庶物指教、乃至直観教育は、恐らく原理的には今日の主張につながる多くのものを暗示はしているけれども、その主張の中心はむしろ、形式主義教育や言語中心主義の教育に対して、経験による教育、生活につながる教育、乃至は心身の調和的発達を主旨とするものであつた。これ等の主張の正しかつた事については、その後の学習心理学の研究が方法的に裏付けて行つた。併し廿世紀の今日における視聴覚的手段は、印刷刊行物はもとより、映画、ラジオ、テレビ等、いわゆるマス・メデヤとして、教育全般の問題を、コミュニケイションという基本的な社会事象に環元して検討する事を要請している。

一体我々の日常社会生活において、いろいろの情報を伝達するものは、いろいろの信号であり記号である。人類の生活のうちでも、衣食住という基本的要求はあまり変らないが、変つている部分は信号や記号であるといつて過言であるまいし、又文化と称するものゝ実体は、こうした信号や記号が複雑になる事によつて、一層推し進められているといつてよいであろう。"Philosophy in a New Key" という本を書いた Langer は、世界の歴史の各時代には、夫々その時代を根本に貫く概念が Key concept として流れているが、今の時代には、シンボルという事が重要な Key concept だといつている。即ち「経験科学が進んでくると、直接の観察ばかりでなく、むしろ間接の手段によつて観察されるものを読むとか計算するとか飜訳するという事が大切な仕事となつて来た」(1) という意味のことを述べている。こうした読むとか計算するとか飜訳するという事は、すべて我々が信号（サイン）とか記号（ボル）とかにかゝわる時に起る現象であり、これこそコミュニケイションの中心問題に他ならない。

Langer によれば「サインとは、起つて来た反応に実際に一致する

刺激の対応物」であつて、サインとそれの指す実体とは一対一の関係にある。併し、シグナルでもまだその対応物がある事を前提にしているが、シンボルになると、典型的なシンボルである「言葉」にみられるように、「何かについて語られる時に使われるものであつて、我々の目や耳や鼻を直接それに向かせるものではない。むしろ我々が、そこにないもの（in absentia）について考えたりあるいは言及したりする事が出来る人間特有の態度を発達させる所以のものである。ところでサイン・シンボルと、その対応物は、主体者（この場合人間）に対して、一対一の関係にある。そうして、その対関係のうち、対応物は、サイン（シグナルもシンボルもふくめて）よりも、主体者にとつて関心の深いものであり、後者（サイン）は前者（対応物）よりも、主体者にとつて接近の容易なものである。たとえば、我々は明日の天候により多くの関心をもつているが、若し今日の天候が明日の天候に関連をしているならば、それは我々にとつてサインの役目をしている。」この場合、主体者は、解釈者 Interpretant ともいわれる。そうしてサインからシンボルまでの関連は連続的でいろいろの共通点があるが、サインとシンボルの根本的相違をもつと別の角度からながめると、サインはそれに直接反応をしかける代用物となるが、シンボルは、その対象について考えるようになるための媒介物 Vehicles である。シンボルはその解釈者が、その関連を見出して、意味のある働きに利用する事にかゝわつている。(2)

Langer は言葉をシンボルの代表としてとりあげたが、言葉の他には芸術や儀式にいたるまでシンボルという観点から論じている。言葉というものは、ノーマルな感官をもつた人間のコミュニケイション手段であるけれども、ろう唖者の場合には、いろいろな身振り動作などが、言葉と同じような働きをしているし、ノーマルな人間の場合でも、そうしたものは、話し言葉を補うコミュニケイション手段であり、そうした物も、言葉と同じような文脈をもち文法をもつていることがわかる。そう考えると、我々の文化の伝統は話し言葉 Verbal Language を中心としているけれども非話し言葉Non-Verbal Language が可成りコミュニケイションの役割を果している事が認識されなければならない。Ruesch と Kees は、非話し言葉として、サイン言語と行動言語と物体言語の三つを分類している。(3) 話し言葉が教育の中心関心事であつた時代に、学校の仕事といえば、書かれた文字、印刷された書物というシンボルを読む事を教える事であつた。併し、文字の出現以前には、絵とか太鼓の音とか、動物の足跡を読む事に関心が払われただろうし、文字が出現してからの教育でも、幼児期には文字を教える初段階として（否それ自身を目的として）絵本や小動物や、いろいろな具体物をもつてあそびたわむれるうちに、それらに馴れ且つ学習する。ところが抽象の極地のような無線電信でモールス符号を使つていた段階から、ラジオが肉声や楽器の原音を伝え、テレビがイメェジや色彩まで伝えるようになつた事は、コミュニケイションの歴史におけるプリミティブなものゝ回復というか、再認識という意義がある。絵画から写真へ、写真から幻灯へ、幻灯から映画へ、映画からテレビへ、という移り行きを見ても、人間のコミュニケイション手段が、段々感覚的な方法を選び、現実感を強調する方行へ進ん

で来ている。特にマス・メデヤの出現は、単に速報性、広汎性というメカニズム自体の特性のみならず、これまでの書かれた文字や話し言葉という抽象的な通路を拡げて感覚や感情に訴える通路を作った点で、非常に大きな変化である。

それならば、一体このような具体性の回復という事は、教育上どのような意義があるであろうか。一方においては、絵や写真や映画ラジオ、テレビを見せる事は、むしろ学力を低下させるものではないか、テレビは白痴化を促進するものではないか、マス・メデヤは聴衆から考える力を奪つものではないかという議論に我々はどう答えたらよいであろうか。

それに対する今日の回答は、むしろ我々の学習経験においては、抽象と具体のバランスの保たれる事の必要を強調する点で一致している。たとえば、Edgar Dale は

1 すべての経験は、具体と抽象とのスケールの間にある。
2 我々の経験の基底は、直接的感覚的経験である。
3 その経験の頂点にあるものは抽象的な経験で、代理経験である。
4 具体経験だけでは統一性がない。
5 抽象経験だけでは、他人の一般化した経験で自分の経験はもたないという危険が起る。
6 教育の歴史は、概念に内容をもたせ、教育を現実に強く結びつける事であつた。

という根拠から「積極的な思索、批判的思考は、具体的なものを抽象化し、又抽象的なものを具体化するに役立つものである。」といつている。(4) この事は又、お茶の水女子大の波多野教授がいろいろな機会に、パブロフの信号理論より説き起し、感性的な第一信号の世界に対し、視聴覚的教具教材を利用する事によつて、理性的な第二信号系という体系的な認識に高まるプロセスを論じて居られるのと一致する。(5) したがつて、視聴覚教具教材の利用という事は、「考える力を奪う」のでなく、「より深く考えるようにする」ための手段に外ならないのである。そうして又、この波多野教授の理論は、Langer のシンボル論といろいろの点で関連をもつている。具体的な経験はばらばらでも、それが抽象的経験と関連づけられるところに、経験としての統一が出来る。統一的な経験は、それ以後に附加される経験に対しても選択的に作用する。だから Langer も、「動物の智慧は累積的であるが、人間の智慧は選択的なところに特色がある。年老いた象は、その群の中で最も賢明である。人間の場合だつて、必しも選択的な智慧がうまくない事もある。年長者がたまに偉いこともあるが、概して普通以上に迷信や誤つた考や非合理な独断にみちている事が多い。」(6) といつている。

もつとも、感覚的経験もばらばらだからといつてまるつきり指向性をもたないとか、まるつきり受け身的な経験であるという事はいえない。元来感性をあらわすギリシャ語のパトスは受け身的な意味をもつているので、感性は受け身と受け取られ勝ちであつたが、最近 Arnheim などは Art and Visual Perception という書物の中で、次の様に述べている。

「視覚に関しては、心は丁度写真のカメラのような働きをするものと考えられていた。併しこのように物を例にとならいで、科学者が偏

見なき心をもつて事物を観察すると考えるならば、視覚は機械的な記録をする物とは違つた物である。第一に、視覚は単なる受け身ではない。イメージの世界は、単にそれ自身を忠実な感官の上に写すのではない。むしろ対象をさがして、我々はそれに近よろうとする。我々は見えない指でその空間をたどり、物の見えるはなれた所に出て行き、それにさわり、それをつかみ、その表面を精査し、そのふちをさぐり、その地肌をしらべる。それは全く積極的な仕事である。」(7) と。

このように、我々の経験が人間特有の現象としてもきわめて選択的であり、又従来受身的にのみ解され勝ちであつた感性的経験が、それ自体ですでに積極的であるという事は、我々の経験がはじめから図式的な体系をもち、その体系をそだてつゝ成長して行くものと解してよいであろう。(8) この個人の経験内の図式性という事は、集団というものについて考えてみても、その集団の文化が、個人の経験よりもはるかに普遍的でありながら、やはりその集団独自の図式をもつていることが考えられる。

ところで、視聴覚的資料もそのうちに数えられる我々の信号なり記号なりには、二つの表出の形態がある。Langer によれば、表現的形態 Presentational Form と論述的形態 Discursive Form である。Ruesch と Kees でこれに相当するものは、類比的信号化 Analogic Codification と要素構成的信号化 Digital Codification である。前者は対象物の外見によくにた信号を作るもの、後者は外見的には何の関連もないが、ある特定の要素を結合させて内容を指示するような信号を作るものである。たとえば写真とか地図などは類比的であり、碁盤の上の碁石の配置などは要素構成的信号であるといつてよかろう。人類学的に民族の話し振りを研究してみると、ユダヤ人は非常に論理的な民族であるから、話の論理の強調点にゼスチュアが入いて要素構成的であるが、イタリー人はゼスチュアが話の表現に忠実にまねるようにするから類比的で大きく、イタリー人が立話をする時は間隔をおいて話しているそうである。(9) 概していうと、感性的表現は一般に類比的であり、理性的表現は要素構成的である。非話し言葉的言語は大体において類比的である。人間の幼児から成人にいたる自然な発達の過程においても、先ず類比的信号化になれ、その後徐々に、要素構成的信号化に習熟する傾向をもつている。だから Ruesch と Kees は、「最近の解剖学的及生理学的研究によれば、類比的信号化は、有機体の中では、要素構成的信号化とはちがつた組織にもとづいている事が明かになつた。臨床的な観察によれば、類比的信号化は、感官、脳、及び腺、筋肉の殆んど同時的昂奮を起すような組織をもつているようである。要素構成的な信号化では、知覚及び送効器官の昂奮は、中枢機能からずつとはなれているようである。だからその働は長い時間的間隔で区切ることが出来る。類比的信号化による昂奮のよい例は、自分の筋肉を動かす事なくしては知覚したり考えたり反応したりする事の困難な幼児に見られる。刺激と感官と脳と筋肉とは、一つの大きな反射回路で結合されているみたいものである。大人にあつては、刺激が言語的性質のものである場合、刺激と反応との間には、必しもそのような直接的結合はない。類比的信号化の場合には、局部感の欠けている要素構成的な場合より、はるかに多く身体

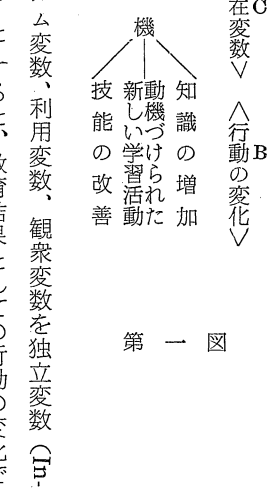
に信号を『感ずる』のである。」又「系統発生的に古い構造をもつ類比的信号化は最初に学習され、系統発生的に新しい構造を持ちかつ後年に学ばれる要素構成的及び言語的信号化とはちがつた通路をもち、結合をしている。」したがつて「ある強度の神経的及精神的錯乱は、すべて要素構成的―言語的―論述的形体の言語が、類比的―非言語的―非論述的形体の言語よりも、早期において、はげしく作用している。」といつている。(10) だから人間の自然の知的発達には、具体的感覚的経験から入つて行くのが正しい順序であり、それを逆にする事はむしろ危険な事であるとさえ言い得る。

最近NHKの放送文化研究所が、中間報告であるけれども、放送とこどもの生活について静岡県で行つた調査の中で要約しているところをひろつてみると、次の様な事実が認められている。即ち、「ふだんの日の余暇時間の中で、一日に3時間以上もラジオをきくという事は（そういう子が1/4いる）教育上何かと問題をふくんではいるが、実際しらべてみると、少くとも3年生と5年生の段階では、そうしたこどもは、ラジオをあまりきかないこどもより知能も高く、読書力や社会科や理科でよい成績を示すのである。又番組の質から見ると、小学生ではA種（教養）もB種（娯楽）もきく子が、多くのテストですぐれているが、中学生ではA種を選択してきく子が、社会科、理科、英語ですぐれている。」(11) この事も、娯楽番組が教養番組より一層感覚的類比的信号要素を多くふくんでいる事を考えあわせる時、自然な知的発達には、そうした要素が前提になる事を裏付けるものである。

以上において、筆者は主として、視聴覚的経験を通して、理性的な認識に高まる側面をのべて来たが、逆の面から考察すると、視聴覚的経験は、より行動を促す契機をもつているという事である。これはLangerにおいてもRueschやKeesにおいても同じことがいえるが、類比的信号やサインはすぐ行動の対象になるが、要素構成的信号やシンボルは、対象につ、いて考えるのだから、前者と後者との間には、有機体の内部でも間隔がある。したがつて、人を説得して直ぐ行動に駆り出すには、出来るだけその間隔を少くする方がよいのである。もつと極言すれば、出来るだけ感覚的である方が、人をより情動的に行為に駆り出す事が可能である。筆者は前に、最近におけるコミュニケイション手段の、具体性の回復という事をいつたが、この現象は現代における商業広告の中に最もよく利用されている。最近の商業広告の様子を見ていると、如何にして顧客を商品の愛用者たらしめるかという事に、非常な苦心を払つて、いろいろな方法を用いている。たとえばアメリカで調査されたところでは、タバコの愛用者は、いいろのタバコの品質を目かくしして喫ませればほとんどいゝあてる事が出来ないのに、自分はラッキーストライクだとか、自分はキャメルだとか、固定する傾向がある。そこであるタバコ会社は、そのタバコの広告に、出来るだけ若い未成年スレスレの男女のモデルが、そのタバコを喫んでいる広告を出したといわれる。その広告を見た若い者は、若い者の喫むタバコはこれだと考えるようになり、一度それに好みがきまると、一生つゞく傾向があるから、それだけ安定した顧客がもてるという考えにもとづいたものである。その時に若いモデルは、将来の愛好者に対して、心理的に同一化 Identification の役割を果したのである。

又、筆者は先日、東京のテレビでバーテンがカクテルを作つているのを見たのであるが、一緒に見ていた人の中には、バーテンと共にシェーカーを振る格好をしている人が多かつた。この点はラジオの場合にはあまり起らなかつた事で、聴覚に視覚が加わることによつて「学習への参加」が容易になる非常にいい例ではないかと思う。最近のラジオやテレビの番組でクイズなど聴衆を参加させる番組が多くなつたが、スポンサーは商品をおぼえてもらうには、単なる言語的な方法よりも、非言語的な方法、視聴覚的な方法を通じて学習者を参加させることがより有効である事を知つているのである。

視聴覚的方法の効果を検討する場合に、ラジオとテレビと映画と幻灯とでは、同じ内容でも、それぞれちがつた効果をもつているし、無論その内容によつては、学習者自体の文化的背景、成長の度合、興味、及びその与え方によつて、いろいろちがつた効果をもつている。そうしたコミニュケイションの全般の要因を概観する上で、May と Lumsdaine が映画の要因分析のために掲げている図は参考になる。

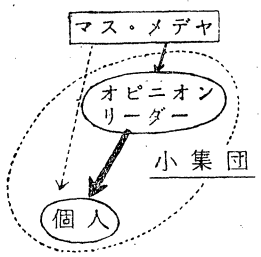


第一図

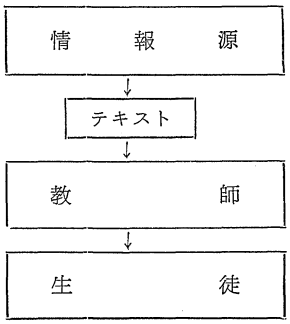
先行条件となるフィルム変数、利用変数、観衆変数を独立変数（Independent Variables）とすると、教育結果としての行動の変化である知識の増加、動機づけられた新しい学習活動、及び技能の改善は依存変数（Dependent Variables）である。そうして、このAとBの中間にCの介在変数（Intervening Variables）が入るが、May と Lumsdaine は、その一つとして動機づけをあげている。介在変数としての動機は、学習結果の大部分を左右するものであるし、又他方、動機は先行条件によつてひき出されるものであるから、CはAに対して依存変数となり、Bに対しては独立変数となる。(12) この図は、フィルム変数の代りに、他のメデヤを変数として代置する事も可能であるから、メデヤ変数として視聴覚的方法によるコミュニケイションの要因関係を示す図表として一般化する事も可能である。Katz と Lazarsfeld は、独立変数をメデヤ、依存変数を聴衆にしぼつて、この二つの間の介在変数として1メデヤの露出（聴衆の接近又は注意）2メデヤ自体の性質3内容（形態、表現、言語等の意味において）4聴衆の態度及び心理的傾向性をあげているが、わけても、最近注目されるようになつた視点として、仲間関係 Interpersonal Relations をあげている。即ち、第一次集団乃至小集団における仲間関係の再発見である。(13) このことは、一九四〇年の大統領選挙戦の時、当時のマス・メデヤとしてのラジオや印刷物が、投票の最終決心をする時に案外直接効果がなく、むしろ地域社会の各階層の仲間間におけるオピニオンリーダーの、マス・メデヤと各人の間に入つてリレーする役割が強いことが確認されて以来、マス・コミニュケイションの浸透過程における二段の流れという事に関心が深められるようになつた。(14) 尤もオピニオンリーダーは、決して日本でいうようなボスのような人物ばかりでなく、映画、政治、ファッション、買物などそれぞれの領域におけ

る話題のリーダーで、それらの人々は、他の人に比べて、他の人に比べて、マス・メデヤへの接触が深いという事もわかつて来た。(15) こうしたメデヤに対する小集団及びオピニオンリーダーの役割を教育の次元におとして考える場合、学級における小集団や、地域社会における社会教育のための集団の活動で、今後メデヤを通して、どういう影響をうけるかという事は興味ある研究問題である。勿論マス・メデヤの情報は、小集団の中のオピニオンリーダーを通じて以外に、個人に対して直接にも入つて来るから、受け手の側からすれば、情報の通路は二通り考えられる。(第二図) 併し、オピニオンリーダーによつて解釈し直された情報は、その集団内のより実感のこもつた通路を通つて来るから、直接の通路を通つてくるものより、

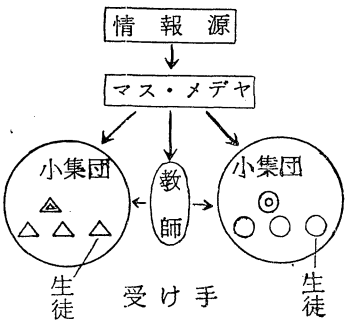
第二図



第三図



第四図



より強力であると考えられる。

又これまでの話し言葉や書き言葉を主とする学習が、指導者↓学習者（第三図）という垂直的人間関係において学習が進められていたのに対し、ラジオやテレビのように、あらかじめ教師が内容を知悉しているわけに行かないような内容が出てくるようになると、たとえば第四図のような、（これでも充分意をつくしていると思われないが）もつと複雑な人間関係の社会構造の中で、集団の文化的背景に依つて解釈し直されて、個人に伝つて行くようになるであろう。

これまで考察したところは、主として送り手をはなれたコミニュニケイションの過程についてゞあつたが、最後にその送り手と内容に関する問題について述べて置きたい。Gerbner は、内容分析としては、それが一般に通用している外面上の意味と、その送り手がおかれている環境なり行為の結果との関連という二つの面から考察しなければならないといつている。(16) たとえば、「このXというタバコを喫いなさい。他のよりずつとうまいです。」という広告は、内容的にはこのうたい文句通りの意味と、本当にうまいまずいは別として、広告者の意図と、その社会に及ぼす結果という事を考えずには居られない。だから広告者や政府機関が、その宣伝効果を知るための実用的研究 Administrative Research には、そうした意味での内容分析はふくまれないかも知れないが、純粋な学術研究 Critical Research には、是非とも内容分析がふくまれなければならない。Lazarsfeld は、「現代のコミュニケイションのメデヤは、非常に複雑な道具であつて、如何なる場所に使われていても、それを使う人が当初考えていた以上の働き

を人々に加えるし、又それ自身のはずみでもつて、それを使う人が考えていたよりははるかに自由のきかない事があるものである。」といい、更に学術的研究家は、実用的研究家とちがつて、「こうしたメデヤは、如何にして組織され、如何にして支配されているか？そうした制度的背景のもとに、中央統制化、標準化及び促進的圧力の傾向はどのようにあらわれているか？どんなに表面からは見えないようになつていても、それはどんな形で人間性をおびやかすようなものを持つているか？」ということを問題にするだろうといつている。(17)

したがつて、コミュニケイション・メデヤとしての視聴覚教育の資料についても、その内容や製作者乃至送り手についても、その性格や社会的文化的背景を考えてみなければならない。映画にしてもはじめエジソンが考えていた頃は、これを教育に使つたらどんなに役立つであろうかと考えていたのに、現在ではそれが商業資本の上にのつて、大衆の娯楽となり、大衆芸術の王者となつている。しかし又科学映画や教育映画もないわけではないが、今日の社会では影がうすい。ラジオの放送をきいてみると、NHKの第一放送は主として不特定の大衆をねらつているが、第二放送は特定の聴衆に対する教養番組であり、民間放送は又、その大部分が不特定の大衆をねらつて居る。そこでは不特定大衆なりあるいは特定の大衆が、その時代においてどういう事に関心をもつているかゞ番組編成の基準になるから、そうした番組の内容を分析をすることは、その時代の文化的背景を分析する事になるであろう。

Bogart は大衆芸術 Popular Arts と高級芸術 Elite Arts の特性を対比させつゝ、テレビジョンを大衆芸術の代表として、その性格を分析している。(18) 併し、今後は教育映画にしてもラジオ・テレビの教育番組にしても、その中間の、あるいは第三の領域として考察されて行かねばならないのではなかろうか。半官半民の形で運営されているNHKの教育放送と民間の教育放送が、今後その企業形態や現在の日本の文化的背景の上に、どういう内容を反映して行くかという事も興味ある問題である。千円の紙幣は、額面は千円であつても、その用いられる歴史的社会的文化的環境の中で、千円の意味するものがちがつてくる。新しいメデヤの出現やその使用法によつて、教育の仕方も、教育の行われる社会的構造も、意識するとしないとにかゝわらず、いろいろな制約や変化をまぬがれるわけに行かないであろう。

参考文献

(1) Langer, Susanne K., *Philosophy in a New Key*, New York: The New American Library, 7th ed., 1955, pp. 15–16.

(2) *Ibid. Chap.* 2,3.

(3) Ruesch, Jurgen and Kees, Welden, *Nonverbal Communication*, Berkley and Los Angeles: University of California Press, 1956.

(4) デールの視聴覚教育・西本三十二訳・東京・日本放送教育協会・一九五七年・二三—四四頁。

(5) 波多野完治・視聴覚的方法の心理学・東京・日本放送教育協会・一九五六年・四四—七九頁。「認識過程と教育過程」お茶の水女子大学人文科学紀要・第六巻・一九五〇年。心理学と教育・東京・牧書店・一九五六年。其他。

(6) Langer, *op. cit.* p. 27.

(7) Arnheim, Rudolf, *Art and Visual Perception*, Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1954, p. 28.

(8) 野津良夫「視聴覚教育の図式」放送教育・東京・日本放送教育協会・一九五七年十一月。

(9) Ruesch and Kees, *op. cit.* pp. 8–9., 23-24.

(10) *Ibid.* pp. 175–176.

(11) 日本放送協会放送研究所・放送とこどもの生活（静岡調査中間報告Ⅰ―文研月報第8巻第8号抜刷）一九五八年八月。

(12) May, Mark A. and Lumsdaine, Arthur A., *Learning from Films*, New Haven: Yale University Press, 1958, pp. 7–10.

(13) Katz, Elihu and Lazarsfeld, Paul F., *Personal Influence.*, Illinois: The Free Press, 1955, pp.19-25.

(14) *Ibid.* pp. 31-42

(15) *Ibid.* pp. 309-320.

(16) Gerbner, George, "*Audio-Visual Communication Review* Vol. Vl, No.2 (Spring 1958), pp. 86-87.

(17) Lazarsfeld, Paul, "Remarks on Administrative and Critical Communications Research, "Cited by Gerbner, *ibid.* pp. 99.

(18) Bogart, Leo, *The Age of Television*, New York: Frederik Ungar Publication, 1956. pp. 20-41.